

ここで『全唐詩』『宋詩紀事』により詩人の数や一人が残した作品数を比べてみると、宋代のほうが多い。いずれもおおよその数だが、詩人は、唐が二、二〇〇人であるのに対し、宋は三、八〇〇人、一人当たりの詩数は、唐では白居易が二、八〇〇、杜甫一、五〇〇、李白一、〇〇〇余であるのに比べ、北宋の蘇軾は一、四〇〇、王安石一、四〇〇、南宋では陸游が九、二〇〇、楊万里三、〇〇〇以上である。ところが、宋代の詩は、唐詩に比べてあまり知られていないし、教科書に取り入れられる作品も多くない。それは、唐代には近体詩の形式が確立されたのみならず、その内容にも優れたものが多かったからであり、一六世紀頃の明代に古文辞学派が登場したのも、唐代以後それらを上回るものが出てこなかったことを示しているよう。

《主な参考文献》

- 村上哲見著『漢詩と日本人』、講談社選書メチエ、一九九七年。
 莊司格一・小野四平・小川陽一・三宝政美著『中国文学入門』、白帝社、二〇〇二年。
 吉川幸次郎著『宋詩概説』、岩波文庫、二〇〇六年。
 石川忠久編『漢詩鑑賞事典』、講談社学術文庫、二〇〇九年。
 金文京著『漢文と東アジア』、岩波新書、二〇一〇年。

〔附記〕本稿は、「漢詩文を読む」と題して開いた教員免許状更新講習（二〇一〇～一六年）のうちから、韻と漢詩に関する内

容をまとめたものである。講習の概要については、渡昌弘「教員免許状更新講習実施報告」『東海北陸教師教育研究』第二十九号、二〇一五年、参照。

渡 昌弘 人間環境大学教授（中国社会文化論）

えている。

後半はさらに気宇壮大である。千里をも見渡す眺めを更にきわめようと思い、もう一層上の階へ上って行った。前半二句で十分な景色だが、それをさらに上に登り、もっと広々とした大きな景色を見渡したくなったというのである。また後半二句は、二つの句が意味の上では一つながりになる「流水対」になっている。この詩は「全対格」の形だが、後半二句が流水対なので、全体として見ると対句の技巧のあとがあまり感じられない。ただ細かく見ると、色の対比、「千」と「一」の数字の対比など、詩を引き締める効果がきちんと加算されている。

なお、作者王之渙は辺塞詩に優れるが、現在六首しか残っていない。また官僚としては出世しなかった。

さて、中唐以降になると、著名な詩人の多くは科挙官僚であった。白居易（七七二～八四六）もその一人で、科挙に合格し官途を進んだ。ただ政争に巻き込まれるなどして左遷と出世を繰り返し、「香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁」は左遷された時のものである。

ところで、詩に対する評価は、杜甫や李白の作品では亡くなつてからだが、白居易の作品は存命中から高かった。白居易は自身の作品を区分して詩文集『白氏文集』を出版したが、それらは平安時代の日本に輸入され好まれた。

さて柳宗元（七七三～八一九）も、官界においては白居易と同様であった。柳宗元は最初エリート官僚として順調に出世コースを歩んでいたが、政治改革運動に加担して挫折し、左遷された。

三三歳から一〇年間、永州（湖南）の司馬となっていたが、その時期の詩に、自然描写の中に自身の孤独の寂寥をうたったものが多く残されている。次の「江雪」は、あたかも一幅の墨絵を前にしているかのように、古来五言絶句の名作と評されている。

千山鳥飛絶 万径人蹤滅

孤舟蓑笠翁 独釣寒江雪

前半の二句は対句で、「千山」「万径」の対語は、大きな数字で眼前の風景を大きくとらえている。上方にながめやる山々も、下方に見えるすべての道も雪におおわれ、一望すべて白色であることをうたっている。

後半の二句は、「孤舟」「独釣」「寒江」などの孤独を表す語を効果的に使いながら、視線を漁師の姿へと凝集させていく。雪の降りしきる中を一艘の小舟の上で一人釣りをしている漁翁の姿が、眼前に迫ってくるようである。この漁翁こそ柳宗元自身の心の投影された姿なのである。

科挙に詩が取り入れられた関係からか、自然のほか、自分の感情を詠んだものが多く知られている。そのほかには当時の社会の様子を詠んだ杜甫の「兵車行」、白居易の「売炭翁」などがあり、いずれも政治批判が込められている。また恋愛を詠んだものは、晩唐の李商隱（八二三～八五八）からである。

五、おわりに

さて一〇世紀、唐が滅亡し、しばらくして宋が成立した。こ

杜甫は家族を鄜州に疎開させ、新たに即位した肅宗のもとに駆けつけようとして捕虜になった。そのときに詠んだのが「春望」である。

「春望」は、七五七年、杜甫が四六歳、長安に幽閉されて二年目の春の作で、荒廃した都にもまた春がめぐってきたことを詠んでいる。

国破山河在 城春草木深

感時華濺淚 恨別鳥驚心

烽火連三月 家書抵萬金

白頭搔更短 渾欲不勝簪

一二句は対句で、第一句は遠景、第二句は近景。国都長安が破壊され、「山河在り」とは宮殿や高樓が建ち並んでいたころは見えなかった山がくつきりと見え、川は人事の興亡を知らぬげに流れているということ、次の「草木深し」はあたりに誰もいないことを暗示している。都が栄えていれば雑草が生い茂ることもない、人影もまばらな廢墟。この二句は何げない表現だが、都の荒廢した様子を立体的に表現している。

杜甫の詩には、天下国家（公）のことと自分や家族（私）のことがより合わさる特色がある。この詩も三句以下で、時に感じて悲しみ（公）、家族や友人との別れを恨み（私）、戦火が続き（公）、家書もない（私）と歌い、年を取り（私）、お役に立てそうもない（公）と結ぶ、整然とした構成になっている。

ほかに、自己の悲傷から発して天下国家に及ぶという構成のものに「登岳陽樓」がある。杜甫の詩では、公と私、何れのこと

を詠んでいる句かに着目すると良いかもしれない。

杜甫は、そのあと賊軍から逃れ、肅宗のもとで官僚になる。しかし、まもなく自ら官僚をやめ、家族を連れて四川に向かう。有名な「絶句」は成都での作である。

ところで、唐詩は四つの時期（初唐、盛唐、中唐、晩唐）に分けられるが、以上で取り上げたのは盛唐の人たちである。初唐は約一〇〇年、盛唐は約五〇年、中唐と晩唐はそれぞれ約七〇年ほどとされている。短い盛唐の時期に著名な詩人が輩出しているのは、青年期を繁榮の中に暮らしながら、安祿山の乱により一気に凋落を味わったからだと言われている。

その盛唐の時期からもう一首、王之渙（六八八～七四二）の「登鸛鵲樓」をあげておこう。五言絶句の最高傑作の一つである。

白日依山尽 黄河入海流

欲窮千里目 更上一层楼

前半二句では、第一句が遠景、第二句は近景である。第一句では、山に添いつつ沈む太陽、西方の山並みはうしろに太陽が沈むので、黒いシルエットになる。真っ赤な夕陽が黒い稜線に寄り添いながら沈んでいくのであり、夕陽の赤と山の黒の対比が強烈な印象を与える。つづく第二句では、眼下に、北から流れてきた黄河がこのあたりで屈曲し、およそ九〇度向きをかえて東へ流れていくのが見える。すさまじい勢いの流れで、その様子を「海に入りて流る」と表現した。ここは河口から二十キロもあり、実際に海は見えない。それをあえて「海に入りて」といって、黄河の流れの勢いを表そうとした。また、白日と黄河が色の対比になって鮮明な印象を与

「竹里館」もその別荘を詠んだものだが、ほかに安西都護府に使う親友の元二を見送った「送元二使安西」もある。

順調に暮らしてきた王維であったが、晩年、安祿山の乱に際して賊軍につかまり、強制されて反乱側の官僚となった。

さて、則天武后のときの科挙合格者に賀知章（六五九～七四四）がいる。約半世紀の宮仕えをやめて故郷へ帰り、八〇余歳の作に「回郷偶書」がある。これを載せている教科書もあるが、それはともかく彼は李白を見出した人物としても知られる。

李白（七〇一～七六二）は科挙に合格することはなかったが、賀知章の働きかけもあり、玄宗のもとで宮廷詩人として活躍した。ただ次にあげた「黄鶴樓送孟浩然之広陵」は、宮廷詩人となる前の作品である。

故人西辞黄鶴樓 煙花三月下揚州

孤帆遠影碧空尽 唯見長江天際流

前述の孟浩然と交流したうちの一人が李白だが、この詩は親友孟浩然が長江を下っていくのを見送ったもので、年代には諸説ある。孟浩然が下っていく揚州（広陵）は長江下流域の中心をなす繁華な町、米と塩の集散地で、一生のうち一度は訪れたいというのが当時の人々の願いであった。

前半は、春の花がすみの三月に華やかな町へ向かっていくのだから、何やら浮き立つような雰囲気包まれる。これに対して後半は、去りゆく孤帆をクローズアップし、それが青空の彼方へ消える瞬間をとらえている。前半の明るく華やかな雰囲気とはうらはらに、寂寥感・孤独感が迫ってくる。

孟浩然是五〇歳近くで仕官の当てもなく、見送る李白も三〇代半ばを過ぎていながら、まだ放浪の身であった。つまり、送る者も送られる者も不遇な身の上だったのである。黄鶴樓の上からいつまでも見送り、後に流れるのは長江ばかりと結んでおり、無限の惜別の情を尽きることにない長江の流れに託している。景と情がみごとに融けあった作品である。なお長江は大河であるが、黄鶴樓のある武漢あたりでは川幅が一、三〇〇メートルもあったとのこと、あたかも小舟が大海に出ていくかのようであったろう。

李白は、このあと宮廷詩人として活躍することになるが、足かけ三年ほどで長安を去る。そのご杜甫（七一二～七七〇）と出会い、しばらく一緒に旅をする。杜甫も仕官を目指していたが、科挙に合格しないため有力者の推薦によって官僚になろうと、李白と別れたあと長安に向かった。

先に述べたように科挙に詩が取り入れられ、その結果、作詩は言わば就職活動の一手段になった。そのため杜甫に限らないが、作った詩を有力者に披露して能力があることを示して回ったのである。杜甫の場合、長安の街に人を訪ねては門前払いを食わされ、思いは遂げられなかった。彼の「貧交行」には腹から出たような叫びがある。

その後、やっとの思いで下級だが官僚に就けるまでになる。しかし、七五五年、不幸にも安祿山の乱がおこり、賊軍に捕えられてしまう。その年の一〇月に任用が決まったが、十一月に反乱が勃発、翌年六月に長安が陥落して玄宗は蜀（四川）へ逃げ、退位。

し事実であるとすれば、神助があつたとも考えられた。

なお、唐代の科挙はいわゆる資格試験で、合格がそのまま官僚への採用ではなかった。したがって科挙合格後に採用のための試験を受ける必要があつたのだが、この点については省略する。

四、唐詩と詩人

試験であるから科挙には合格者と不合格者がいたが、何れも作詩の能力には優れていた。詩人として名を残している人物の多くは官僚であるが、官僚になれなかった者もいる。この点に留意しつつ、以下では中学・高校の教科書に載せられている詩から六首ほど取り上げることにする。

最初に取り上げる孟浩然（六八九～七四〇）と王維（七〇一～七六一）の二人は、ともに盛唐の詩人として名を残しているが、人生は大きく異なっていた。孟浩然是生涯官僚になれなかったのだが、王維はエリート官僚であつた。

孟浩然の「春暁」は、

春眠不覺曉 処々聞啼鳥

夜来風雨声 花落知多少

で、全体の構成は「起承転結」の模範として常に引き合いに出され、春の朝の心地よさが理屈抜きに伝わってくる。鑑賞はそれで良いとして、孟浩然の生き方も見えてくる。つまり「春眠暁を覚えず」とは、悠々といつまでも朝寝を貪っているさまにはかならない。宮仕えの人たちは、朝まだ暗い時分から役所に出掛けなければな

らないのに引きかえ、自分はのうのうと春の朝寝を楽しんでいる、と嘯いている。

このように見ると、後半の情景も、花びらの散るにまかせて自然に浸りこんでいる光景と理解される。そして、こうした生き方を高しとして詠っているのである。あるいは陶淵明（東晋）のような姿が見えるとも言えよう。

他方、王維は二一歳の若さで科挙に合格したエリート官僚で、彼は官僚生活の合間に心を休める別荘を、都長安の東南、藍田山の麓に求めた。そこを「輞川荘」と名付け、気の合う友人たちと閑適の暮らしを楽しんだ。こういった生活を「半官半隠」という。そこは山も森も谷川も湖もあり、その間にいくつも館が点在する広大な別荘であつた。その別荘を詠んだ「鹿柴」は、

空山不見人 但聞人語響

返景入深林 復照青苔上

で、前半は静けさを強調している。第一句の人影が見えないとした静けさは、第二句の人の話し声だけが聞こえることで一層強調される。何もない、何も物音がしないとするよりも僅かに声だけ聞こえるといった方が深閑とした様子が際立つ。六朝時代の詩よりヒントを得た表現である。

この詩は後半が素晴らしく、夕日と苔との瞬時の出会いに美の発見がある。夕陽の赤と苔の青（深緑色）が互いに照り映えあつて、絵のような情景である。王維の詩は「詩中に画あり」と評されるが、この色の対比も彼の画才を示している。なお彼は画のほかに琴もよくし、また熱心な仏教信者で詩仏と称される。

三、科挙社会と詩文

「漢文・唐詩・宋詞・元曲」という語が示すように、詩は唐代に完成したと言えるのだが、その背景には科挙での詩の重視があった。

科挙は学科試験によって官吏を採用する制度である。貴族中心の隋・唐時代には仕官コースの一つにすぎなかったが、貴族が消滅した宋代以降は官僚採用の中心となり、二〇世紀初めまで続いた。ふつう儒教的教養が試験され、地方と中央で何段階もの試験をうけ、その最終試験は三年に一度おこなわれて、毎回数百人が合格した。

科挙の概要は以上のようなのだが、唐代には、則天武后の時代（第三代高宗の皇后で、のち皇帝に）より、貴族勢力を打破する必要から科挙出身者が積極的に登用された。そのころの科挙の出題内容は、儒教の知識、策などの小論文のほかに、詩の作成が課せられた。そのため科挙合格を目指す者たちは作文・作詩の能力をも身につけたのであり、これが詩の盛行につながった。

科挙で課される詩は、通常は六韻以上の五言排律であった。六韻とは押韻が六箇所、すなわち十二句の五言排律のことである。

ところで、合格答案としての詩には優れたものがないとされ、ほぼ廃棄されたのだが、例外はあるもので、次の銭起（七一〇？～七八二？）の五言排律がそれである。

「湘靈鼓瑟」（天宝十二年（七五三）試帖詩）

善鼓雲和瑟

善く雲和の瑟を鼓するは

常聞帝子靈

常に聞く帝子の霊なりと

馮夷空自舞

馮夷空しく自ら舞い

楚客不堪聽

楚客聴くに堪えず

苦調淒金石

苦調金石に淒たり

清音入杳冥

清音杳冥に入る

蒼梧來怨慕

蒼梧来りて怨慕し

白芷動芳馨

白芷芳馨を動かす

流水伝湘浦

流水湘浦に伝え

悲風過洞庭

悲風洞庭を過ぐ

曲終人不見

曲終りて人は見えず

江上數峰青

江上に數峰青し

科挙の詩題は古典から語句を採るのが通例で、「湘靈鼓瑟」の四字は『楚辭』からの出題である。そして出題のなかの平声の字に韻をそろえて作るのがきまりだが、この四字のなかでは「湘」か「靈」にそろえることになる。右の詩では太字で示したように「靈」にそろえてある。

この銭起の答案としての詩は、有名な逸話とともに伝えられている。彼が受験のために長安に向かう途中、月夜に宿を出て散歩していると「曲終人不見」「江上數峰青」という二句を吟詠するのが聞こえたが、人影はなかった。長安に着いて試験を受けると、詩題は「湘靈鼓瑟」という四字だったので月の夜に聞いた二句を結びにすえて見事な詩を作り、上位合格を果たしたというのである。詩は結びが難しいといわれるが、この逸話のミソは二句の最後の文字「青」と「靈」の字の韻が合っていたところにある。も

表漢字にする。同じように平声で「冬」と同じ韻母をもつ漢字をグループにし、「冬」を代表漢字とする。

グループの代表にした漢字を「韻目」といい、韻目を一覧できるようにしたものを「韻目表」という。韻目表では、平声の漢字が最も多いので、さらに「上平声」と「下平声」に分けている。韻目には四声と韻母の同じ漢字が属している。その漢字を「韻字」といい、韻字を一覧できるようにしたものを「韻字表」という。(ここの表の提示は省略する)

ところで詩などを学習する際に、「押韻」もしくは「韻を踏む」というのが出てくるが、それは同じような響きの韻母でそろえることである。杜牧の「江南春」を例に挙げよう。

千里鶯啼緑映紅 水村山郭酒旗風

南朝四百八十寺 多少樓台煙雨中

七言詩なので第一句末と偶数句末で押韻する規則だが、該当する「紅」「風」「中」の三字を見ると、何れも韻字表のなかで「東」を代表漢字としたグループに属している。つまり規則通り押韻していることが確認できる。

この押韻について、日本の漢字の音読みを参考に見つけるようにと説明がなされることがある。しかし、これは正確ではない。例えば、李白の「秋浦歌」。

白髮三千丈 緣愁似個長

不知明鏡裏 何處得秋霜

この詩では「丈」「長」「霜」の音読みが「ジョウ」「チョウ」「ソウ」なので、押韻しているかのように思えるが、実際は「長」「霜」

だけである。これは各字の韻を調べると確認できるが、このように日本の漢字の音読みとは必ずしも同じではないのである。

五言詩は偶数句末で押韻する(第一句末は押韻しない)と説明すれば足りるが、「踏み落とす」もあるため、やはり音読みに頼っていると間違えてしまう例として挙げておきたい。ただ学習指導要領の範囲外であるため、中学・高校での取り上げは必要ないかもしれない。

詩はもと声に出して歌うものであったため、歌う時の響きが美しくなるように韻をそろえたのだが、ほかにも工夫を凝らした。それが平仄である。平仄とは四声を平声とその他(仄声)に区分したもので、平声と仄声を組み合わせることで、やはり朗誦した時の韻律の美しさを追求したものである。

詩は『詩経』に見えるものが現存最古とされる。歌われた場所は北方の黄河中流域であり、四言詩であった。それに続いては『楚辞』に収められた南方の雑言詩がある。北方と南方で発達の仕方は異なっていたのだが、秦の始皇帝による統一以降、詩の形式にも変化が現れた。融合した結果、五言詩、六言詩、七言詩が生まれたのである。ただし、このうちの六言詩は発達しなかった。そして唐代には平仄と押韻を中心に形式上の規則が確立し、絶句・律詩などの近体詩が成立した。

他方、この平仄と押韻は文章にも持ち込まれ、駢文として成立した。しかし、中唐以降の古文復興運動により衰えた。

韻と唐詩の話

渡 昌弘

一、はじめに

現在、身近なところに漢詩漢文は見当たらない。お寺の入り口に「下馬」「不許葷酒入山門」と刻まれた碑を見ることがあるが、ほかには、お寺あるいはテーマパークなどに建てられている由緒書きくらいであろう。であるのに、国語科の古典になぜ古文と漢文の両方が含まれているのか。はじめに、この理由を確認しておこう。

中国における文字文化の発達は異常に早かった。そのため、わが日本ではみずからの文字を考えるよりも先に漢字が入って来て、固有の文字を作り出すのはあとのことになった。これは日本に限らず、周辺の諸民族にとっても同様であった。そして漢字を習得することは同時に中国語を習得することでもあり、それは必然的に漢字文化を吸収することにつながった。

また、漢字が入って来るまで日本には文献というものがなかったから、当初から中国の古典に対し、みずからの古典であるかのように接したと思われ、和語の文芸が成熟してのちも、日本の知識人は和語系の韻文散文と並行して漢詩漢文を読み習ってきた。漢文学が日本文学（国文学）の一角を占めていたり、中学や高校の国語科の古典に古文（日本の古典）と漢文の両方が含まれてい

たりするのは、そうした歴史的経緯をふまえてのことである。以下では漢字の韻についてまとめていくが、まず漢文のもととなる中国語の特質について確認しておこう。

二、中国語の特質と韻

中国語は、単音節語で語形変化がなく、おもに語順によって意味をあらわす、いわゆる孤立語である。漢字一字が一音、一義を原則とする単音節語では、発音の総数が制限されるため、同音異字が多くなり、発音によって意味を分別できなくなってしまう。そこで声調による分別がつけられ、いわゆる四声がおこなわれるようになった。こうした分別は意図的に行われてきたのではなく、自然発生的であったようだ。このことに気付くのは南北朝時代の南朝においてである。

さて、漢字の発音は、「声母」（音節の初めにくる子音）と「韻母」（声母に続く音節の残りの部分）の組み合わせでできている。

韻とは「韻母」の「韻」であるが、その数は時代により変動し、また実際の発音と一致しない場合もあった。現在は便宜上、総数一〇六（平水韻）としている。

この韻の分類をするには、まず漢字を声調により、平声・上声・去声・入声の四つのグループに分ける。次に、それぞれの声調ごとに、同じ韻母をもつ漢字を一つのグループにまとめる。例えば、平声で「東」と同じ韻母をもつ漢字を一つのグループにする。そのままでは何のグループか分からないので、「東」をグループの代